

2025 年度「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」 助成公募決定のお知らせ

一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストが公募した「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」助成について、計 4 件の企画が採択されました。選考委員についても併せてご紹介いたします。

2025 年度「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」 助成公募選考委員（あいうえお順）

- 後藤和明（有限会社産直グループこだわり村顧問）
- 田中 優（未来バンク理事長）
- 古瀬繁範（地球と未来の環境基金理事長）
- マエキタミヤコ（サステナ代表）
- 宮田秀明（摂南大学名誉教授／環境科学、食品衛生学、公衆衛生学）
- 安田節子（食政策センター ビジョン 21 代表）
- 山田敏郎（金沢大学名誉教授／化学工学、蜂群崩壊症候群研究）
- 星川 淳（アクト・ビヨンド・トラスト代表理事）

霞ヶ浦（北浦）湖内のネオニコチノイド系農薬濃度の現状把握ならびに当該農薬が北浦のオオユスリカ幼虫の個体数密度におよぼす影響に関する研究（調査・研究）

中里亮治

霞ヶ浦（北浦）の湖底ではこれまで底生動物の中で最優占種であったオオユスリカ幼虫が 2019 年以降激減しているが理由は不明である。本研究では北浦の湖内やその流入河川において、湖水・河川水・底質を採取し、現在の北浦におけるネオニコチノイド系農薬濃度の現状を把握する。さらに当該農薬の濃度勾配を設けて幼虫を飼育し、オオユスリカ幼虫の生存率・羽化数等に及ぼすネオニコチノイド系農薬の影響を明らかにする室内毒性試験をする。

ミカン園土壌中の残留農薬と生物の調査及び啓発用冊子の作成（調査・研究）

辻野兼範

これまで浜名湖と佐鳴湖流域の河川、地下水、ミカンの果実と葉のネオニコの調査を実施し、ミカン園を流れる河川のネオニコ濃度が、平時でも 35ng/L（慢性毒性）以上、出水時には 200ng/L（急性毒性）以上もあることが判明した。出水時には土壌が河川に流出し濃度が高くなり、土壌中の残留ネオニコ濃度が高いことが推察できる。今年度はミカン園の土壌中のネオニコ濃度、対照区として 8 割減農薬ミカン園を調査する。野菜畑にネオニコを散布し土壌中の残留ネオニコを調査しミカン園と比較する。ミカン園の昆虫、土壌動物の調査も行う。これまでの調査結果をもとに啓発用冊子を作成し啓発活動を行う。

秋田におけるネオニコ汚染実態の定量的解明と環境・食の安全基盤構築の県民的展開(2025) (調査・研究、広報・社会訴求、市場“緑化”)

秋田の環境を考える県民の会

2023 年 8 月、秋田市の水道水から EU 基準の 30 倍超のネオニコチノイド系農薬ジノテフランと同 5 倍超のスルホキサフロルが同時検出され衝撃が走った。この調査を主導した「県民の会」の 2024 年度の活動により、県民自ら流域規模でのネオニコチノイド系農薬汚染の実態を把握し自覚しつつある。再申請で活動をより強化し、県民のネオニコ暴露量を解明し、対策の必要・緊急性を周知する。最新結果を基に学習会や集いを引き続き県内各地で実施し、環境・農業・食の実態と課題を共有し、安全で豊かな環境と食をつくる取り組みを強力に推進する。

「世界自然遺産の島」の水田における各種浸透性農薬の検出状況とその使用実態の解明 (調査・研究)

城本(大野)啓子

世界自然遺産登録地の西表島を含む八重山地域の水田において、ジノテフランをはじめとしたネオニコチノイド系農薬が広く使われるようになってきており、その環境影響の実態把握が急務となっている。この目的には、近年発展の著しい、コップ 1 杯の水からどんな生き物が生息しているのかを知ることのできる環境 DNA 分析技術が有用となりうる。そこで私は、本助成事業を活用し、本地域のネオニコ剤使用水田と殺虫剤不使用水田の水を環境 DNA 分析に供することにより、ネオニコ剤が生物多様性に及ぼす影響の環境 DNA による評価を試みる。